



泉類治神父

何ごとも最初が肝心である。私は昭和三十七年、アナウンサーとして山口放送に入り、七年後の四十四年に心臓病を患って一年間休職。それを契機にアナウンサーをやめた。

しかしそれ以後も結婚披露宴の司会を頼まれることが多く、合わせると百五十回は超えていると思うが、そこで心がけたのは開口一番の言葉と最初の三分間のしゃべりである。

イラストも得意な神父



その披露宴を思い描きながら、最初の三分くらいのしゃべりを何回も繰り返し練習する。この部分で人の心をとらえ「きょうの司会者はうまい」という印象を与えればしめたもので、あとで多少の失敗をしても気にはならない。文章でも同じことが言えようが、ましてシリーズで毎回目につくタイトルの大切さは言うまでもないだろう。「サビエル生誕五百年 巡礼の道」というタイトルは比較的早く決めたが、字だけでは単調だし、バックを何にするか迷った。団長のヴィタリ神父

に相談すると、即座に「泉神父に何か描いてもらったら？」と言われた。さすがである。なぜ気がつかなかったのだろうか。スペイン出身のルイス・フォンテス神父は帰化されて、日本名を泉類治という。上智大学をはじめ各地の学校で教え、現在は徳山カトリック教会におられる。

マンガ、イラスト、映画解説、そのうえ料理も得意で、KRYテレビに出演されたこともある。味も抜群で、作るのを見なければもつとおいしい。先ごろPHP研究所から「日本では教えてくれない人生で大切なこと」という本も出版された。とにかく多才かつ博学な神父で、朝日新聞や日刊新周南でも大きく紹介されたので、ご存じの方も多いかもしれない。泉神父がタイトルバックのイラストを描くのにふさわしい理由はほかにある。実は神父はサビエル家の末息子なのである。フランシスコ・サビエルは六人兄弟の末っ子。上三人は女性、四番目が長男のミゲル、その末えいが泉神父なのである。

もちろん、お願いすると快く引き受けて下さり、出来上がったのがこの連載に使っているタイトルのイラストである。巡礼の最後に訪れる聖地がサンティアゴ・デ・コンポステーラ。ヨーロッパのキリスト教徒はこの地を目指して徒歩で巡礼する。昔はこのイラストのようにシンボルマークの帆立貝をつけた帽子にマント、ツエには水を入れるひょうたん、腰にはパンを入れる袋を下げる。こんな姿で二カ月近くかけて巡礼したという。今は巡礼宿に泊まれなかつた時のための寝袋などを入れた大きなリュックサックを背負っての旅で、私たちも何人にも出会った。

泉神父は十一歳の時に日本の殉教者を書いて本に出会い、サビエルの書簡を読んで日本にあこがれて来日し、もう五十九年になるという。神父の出身地はスペイン南部のムルシア。その昔、日本からの天正少年使節団が滞在した所である。四人の少年がヨーロッパに向かったのは一五八二年。八年後に日本に帰った時には、もうキリスト教は禁止されていたのである。歴史に翻ろうされたとはいえ、あまりに残酷な結末である。我々の今回の観光旅行のような巡礼ではなく、長く苦しい巡礼は歴史と同じような厳しさを悟らせてくれるのかもしれない。とにかく内容の乏しい巡礼記にはいいタイトルバックを得てスタートできたのである。(前山口放送取締役ラジオ局長)



朝日新聞や日刊新周南で紹介された泉神父

※泉神父は現在は福岡のイエズス会修道院におられる。